

自立と共生！

たくましい日本！

No. 222号

民主党 中川正春の

永田町かわら版

2004年9月8日

〒100-8981 千代田区永田町2-2-1 衆議院第一議員会館 428号

TEL 03-3508-7128 FAX 03-3508-3428

<http://www.MASAHARU.GR.JP>E-mail g03063@shugiin.go.jp

○イスラエル訪問（つづき）

パレスチナ政府のクレイ首相をはじめ、イスラエルとパレスチナの要人の間を行ったり来たりしながら、会談を重ねました。イスラエルは、口をそろえて「テロが和平交渉を台無しにしている。アラファトを筆頭に汚職にまみれたパレスチナの指導者は、口で言っている事とやっている事が全く違う。彼らは、テロ集団とつるんでいる。」と、言います。パレスチナの人々は、「ガザやヨルダン川西岸のパレスチナ自治が保障されるべき地域へのイスラエルによる入植がいまだ拡がっている。これは、重大な約束違反。イスラエルの中にある大イスラエル運動は、パレスチナ人を全て追い出すこと。テロに対するその何倍もの報復攻撃は、根っこに大イスラエルがある。イスラエルの指導者は、信用できない。」と、言います。この2年の間に、イスラエル当局が建設している分離壁やフェンスが街を分断しつつあります。パレスチナ人を物理的に隔離する事によって、テロがイスラエル人の居住区に入らないようにすることが目的だと言います。結果は、パレスチナの家族が分断され、パレスチナ側から豊かなイスラエル側への出稼ぎも出来なくなってきました。特に、ガザ地域では、経済の荒廃が目立ちます。私達がこの地域に足を踏み入れたと知ったイスラエルの役人が「アメリカ人も行かない危険地帯に、よく行く気になりましたね。」と、他人事のようなことを言います。

不信と憎悪がまた憎悪を生む悪循環。2000年以上も続く対立の歴史に終止符を打つ解決策には、すぐに決めてのいない状況を痛感しました。

○貧困との戦い

ミャンマー(ビルマ)

イスラエルの訪問途中、急遽、東京から連絡が入って、「26日に、憲法の議論をするから民主党の調

たのは、軍事政権とアウンサンスーチー女史とを和解させて、ミャンマーの発展を現実的に進めようとする、元在日ビルマ人会の事務局長ウィンナイン氏です。「スーチー女史の生き方では、ミャンマーの国民が救われぬ。彼女の意志をうけたアメリカの経済制裁が国の経済を崩壊させようとしている。批判だけでは、国は創れない。国民が少しでも豊かになれば、そこから民主化も始まる。この際、軍事政権の中核と会って彼らの思いを確かめてもらえないだろうか。」こうした要請を受けて、ミャンマーの厚生、農政、内務、外交の各大臣と会見しました。

「中川さん、私達ミャンマー軍には、日本の武士道が生きている。ビルマをイギリスから開放し、私達の軍制の基礎を作ったのは、当時の日本軍なのです。」緑色の軍服に身を固めた内務大臣から改めてこんなことを言われると、複雑な思いがしました。

民主党がアジア重視、アセアン外交の見直しをうたうなら、その中でも、ミャンマー、ラオス、カンボジアの極貧国三国に焦点を当てて具体的な経済支援策を打ち出すことだと改めて思いました。中国が発電所や道路などの支援を積極的にはじめていることも確認できました。中国は昔の日本型支援を踏襲しています。しかし、現地政権は、日本がアメリカ追随外交を脱して、本当に支援してくれるなら、もっと田舎に入り込んで「村おこし型」「生活改善型」の援助と、私企業の直接投資で雇用創出をして欲しいと言います。これは、後にタイの首相補佐官パンサック氏からも指摘されました。彼は、日本がまずアセアンをリードして、小さな商売人を育てる貸し出しファンド創設をしたらどうかと言います。

これまでの日本のODA(経済支援)に批判が出ています。現場の声で、確実な見直しをすること。日本の、アジア戦略を具体的な政策でまとめること。ミャンマーの坂本竜馬、ウィンナイン氏の情熱が、私の心にまっすぐに伝わってきた貴重な体験でし

査会でまとめた9条、安全保障の問題を皆に説明するように。」ということです。後ろ髪を引かれる思いで、東京にとって返すことになり、その後、改めて、ミャンマーに出かける事になりました。

神戸市出身の先輩、土肥隆一議員と一緒に出かけました。私たちに、ミャンマー行きを進め、橋渡しをし

た。彼の叔母さんミヤミヤウインさんが伊豆で民宿を開いています。おいしいビルマの家庭料理をご馳走してくれるそうです。